

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00104

研究課題名（和文）現代の社会思想における情動の意義の精神分析思想による解明

研究課題名（英文）Psychoanalytic-Philosophical Clarification of the Significance of Affect in Contemporary Social Thought

研究代表者

上尾 真道（UEO, Masamichi）

京都大学・人文科学研究所・研究員

研究者番号：00588048

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フロイトおよびラカンの精神分析理論を、20世紀の歴史的文脈を考慮に入れつつ検討することで、主体-他者間の「転移」的関係モデルに立脚する近代的情動論の、現代における限界を指摘した。同時に、生の経験の内部において異他性の受苦として現れるような情動性の次元について理論的に明確化した。さらに後者の情動概念の帰結を、政治思想、芸術、精神医療制度の三つの領域において検討し、それぞれにおいて新たな実践の土台の手がかりを構想した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで精神分析の情動概念は、二者間における「転移」を基礎とする古典的臨床形態と結びついて理解されてきたのに対して、本研究は、それを越えた集団的かつケア論的な臨床体勢における情動性の理解の道筋を開いた点で、精神分析・思想史研究への新たな貢献をなしている。また政治・芸術・精神医療という具体的領域における検証は、現在行われている実践の解明ならびに将来に向けての建設的なプロジェクトの土台として、有効に機能することが期待されるものである。

研究成果の概要（英文）：This research makes clear the limits of modern conception of the psychoanalytic notion of affect, insofar as it is based on the model of “transference” relationship between the subject and the Other, and brings into relief theoretically a new conception of affect, which could be conceived as passion of the alterity within the life experience itself. By examining its consequences in three domains such as political thought, art and mental health institutions, it profiles a new possible practical basis in these domains.

研究分野：思想史

キーワード：フロイト ラカン 情動 異他性 女性的享楽 サントーム ト라우マ

1. 研究開始当初の背景

近年、社会思想の分野では、2010年代の大衆運動の活発化を受けながら、合理性に基づく熟議や合意といった政治決定プロセスの限界が指摘されるとともに、身体と不可分に結びついた情動の次元が社会構成のうちに占める意義に、大きな関心が注がれてきた。しかるに、こうした傾向にもかかわらず、近現代の社会に理論的、実践的、制度的に大きな影響を与えてきた精神分析における情動概念については、この文脈のもと、いまだ十分に精緻な位置付けが与えられてきたとは言い難い。そのため、S.フロイト、J.ラカンの著作の思想的読解の作業を通じて、現代に応用可能な精神分析的な情動理論の輪郭を描き出すことは喫緊の課題であり、本研究はそれに取り組みべく構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代の社会思想における「情動」概念の基盤を、精神分析理論および相互に影響関係にある哲学・思想の言説を参照することで明らかにし、それに基づいて現代の情動経済体制の分析的な土台を提示することである。

ここで情動論の「現代性」について、まず次の点に注意しておきたい。19世紀以来、社会と情動性の接続自体は絶えず問題とされてきた。にもかかわらず、今日、あらためてこの接続のあり方を検討せねばならないとすれば、それは20世紀後半以来、社会・経済的な構成において生じた地殻変動を念頭におく必要があるからである。本研究はそれを、19世紀から20世紀にかけての「近代」型の情動経済の体制から、20世紀後半以来の「現代」型の情動経済の体制への展開として整理する。前者に関して問題となるのは、とりわけフロイトの初期の「カタルシス」理論に認められるように、表象的構築に対立し、しばしば「抑圧」され、またそれゆえに不気味な仕方ですべて「回帰」を遂げると考えられるような「情動」である。このような情動論は、これまで臨床のみならず、政治や芸術の理論においても、社会の言説的構築と対立する感性的経験のためのモデルを提供してきた。

これに対して、現代においては、いくつかの具体的社会条件の変化に伴って、情動-表象関係の根本的変容が生じていることが予測される。すなわち今日、情動はもはや隠されるのでも、「抑圧」されるのでもなく、表面的秩序と一体となって、社会構築のプロセスに一貫して貢献しているものと考えられる。こうした仮説に関して、本研究は、まず20世紀における精神分析理論と哲学思想との交錯を整理しながら、理論的な図式としてこれを明確化することを試みる。さらに、政治思想・芸術論・精神医療制度の三つの特殊領域に目を向けることによって、その具体的な内実を明らかにするよう試みる。

3. 研究の方法

本研究は、情動論的社会思想への精神分析的寄与を明らかにするために、主にフロイト、ラカンに関する一次文献および関連テキストの読解作業を実施した。その際、特に彼らの理論作業の土台をなしている近現代ヨーロッパ哲学についての文献収集とその読解を行い、その相互的な影響関係を明確化することを試みた。その上で、特に20世紀後半の議論を中心に、芸術、政治、精神医療制度の三つの分野について、情動性の理解枠組みの変化を跡付けるための文献収集と読解を実行した。上記、文献収集・資料収集のためには、特にフランス国立図書館での調査を実施した。

4. 研究成果

本研究は、以下の四つの領域に即して、精神分析的な情動概念の新たな輪郭を描き出した。

(1) 第一の研究として、「情動」概念の思想史的整理を、近代哲学と精神分析のそれぞれの交錯に注目しながら実施した。成果は以下の四つの仕方でも達成された。

第一に S.フロイトの神経症論とその現代的な意義に関する研究を行なった。その際にまず注目したのは、フロイトが対人関係における情動的な結びつきとして構想した「転移」が、同時にその神経症論の構成原理をもなしている点である。この情動概念の認識枠組みを解明するにあたって、本研究は、これまでフロイトの鍵語として注目を浴びてきたわけではない「ダイモーン」の観念を取り上げた。私自身による「ダイモーン」概念への着目自体は2010年に遡るが、本研究では、さらにその理論的構成を1910年代のフロイトの目たサイコロジ論のなかで検討することによって図式的に整理し、そのことによって、「転移」という主客関係の原理的配置の枠組みの外部において展開する情動性の問題を、のちに「精神病」と同一視されることになる「ナルシス神経症」の分野との関連から再発見することになった。こうして情動的触発の契機としての「ダイモーン」には二重の様態「転移」的ないし「転移外」的が存在することが明らかとなった。

さらにこのような二重性を、現代フランスの精神分析家である C.ソレールが展開する「無意識」の二つの区別と関連づけて考察した。ソレールは『ラカン、再発明された無意識』(2009)

および『ラカンの情動』(2011)において、精神分析臨床のなかで従来重視されてきた「真理-無意識」、すなわち言語のコード化作用を前提としつつ、特異の意味を運ぶ無意識とは異なる種類の、無意識概念を論じている。それが「現実的無意識」であり、「無加工の無意識」とも呼ばれるものである。ソレールによるこの概念の提出は、これまでのラカン派精神分析理論の言語主義的前提を越えようとする試みであるが、本研究は、これを上記のフロイトの「ナルシス神経症」論、さらにその考察の延長に位置する「死の欲動」論、特に生-死の欲動プロセスが構成するリズムへの着目と関連づけた。こうして無意識の言語的-真理的な様態と区別される、リズム的情動的様態とが精神分析の思想に含まれていることが明確化された。

哲学と精神分析の言説的交錯に関する議論の整理を実施した。そのための手掛かりに、本研究はミシェル・アンリの著作『精神分析の系譜』(1985)を取り上げ、ここで展開されている哲学史的な整理を、ラカンの精神分析理論と付き合わせながら吟味した。アンリはこの著作において、精神分析を、デカルト以来の近代西洋哲学のうち、ショーペンハウアー、ニーチェをふくむ、情動性を強調しつつ思考する系譜に位置する流れの終局に位置付けている。こうしたアンリの精神分析理論は、現実界や享楽を強調するラカンへと接近しながらも、情動性を内在的な「自己触発」として捉える点で、精神分析に常にみられる異他性の強調と相容れないものであることが確認された。

また上記と平行して、ラカン思想の背景をなす哲学的影響をより具体的な仕方で明らかにするために、戦間期にラカンがシュルレアリストの雑誌に掲載した詩「非理性的間隙 hiatus irrationalis」を題材に、そこにみられる同時代の哲学文脈の影響を調査した。この詩題の由来に関する調査によって、この詩が、コイレから J.ペーメへ、また G.ギュルヴィッチから、E.ラスク、フィヒテへと繋がる広範な思想的文脈を擁するものであることが確認された。さらに、この詩をラカンが送った相手であるアルキエのシュルレアリスム論と付き合わせることによって、この詩に含まれる生成变化的自然論と否定神学的創造論との対比の重要性が浮き彫りにされた。

(2) 第二に、上記のような情動性が具体的に社会思想的な争点となる仕方を、二つの政治思想的文脈において検討した。

1968年以後、5月革命の余韻のあとで、セクシュアリティがいかに政治的争点と結び付いたかについて、ラカンによるマルクス『経済哲学草稿』の読解を再構成しながら検討した。さらに、この68年前後の同テキストの読解は、共通の思想的関心として、F.リオタルならびに G.ドゥルーズ=F.ガタリへと継承されていくものであることを跡づけた。また、そのことを通じて、男性的な幻想の構造(「転移」の基礎)とは異なる仕方でセクシュアリティの展開が、女性の享楽という論点のもとに展開されたことを確認した。

上記のような、ラカンによる享楽の男性論理と女性論理の区別が、現代の政治思想に生み出す寄与について検討を行った。男性論理は、排除を是としつつ全体を確保することによって二律背反そのものを可能ならしめる。他方、女性論理は、全体化の否定を通じて、二律背反そのものを己の分裂の二重性として生きる状況を問題化するものと考えられる。この後者において、情動概念の射程は、前者と異なる仕方で検討されねばならない。こうした理論的展望のもと、ポスト・マルクス主義的な政治理論についての考察を展開した。そこではとりわけ E.ラクハウのラカン受容を批判的に検討したのち、J.バトラーによる、ラカンの影響圏にあるフェミニズム理論への参照の意義を再評価する試みを実施し、社会思想を情動論的に裏付ける議論の土台を設定した。

(3) 第三に、感性の表出媒体であるような芸術の領域における、新たな情動概念の射程を検討する研究を、以下の二つの論点に即して実施した。

ラカン最晩年のジョイス論を、享楽理論の変化という観点から再整理した。ラカンの精神分析理論においては、享楽は、現実性の実定性に対する「喪失」という側面から長らく問題にされてきた。これに対して、ジョイス論において提示されたポロメオの輪のモデルは、もはや喪われているわけではない、三つの享楽様式の機能的あり方を提示している。このことは、ジョイス自身が作品と彼の生とを渾然一体の仕方で、同じ平面状に成立させようとした事実と相応する。この時、芸術は、単に情動性を覆い隠しつつ技巧によってほめめかすものとしてではなく、歌のように、これを証言することで魅了するものと考えられた。

美学領域への応用的研究として、アール・ブリュットの批評的基盤についての考察を実施した。J.デュビュッフェ、H.プリンツホルンのテキストに依拠することで、表象された作品ではなく、むしろ、創造プロセスにおいて作動する欲動的運動と表現のあいだの力動的関係に着目する必要を明らかにした。またそれを通じて、アール・ブリュットの芸術を、生産物としての作品としてではなく、作家と鑑賞者とをつなぎながら特異的な環境を構成するための触媒として理解する視座を提案した。

(4) 精神医療制度に関する現代的情動性の解明のために、感染症とフーコー的生権力の関係、およびそれが今日における「トラウマ」の理解可能性を構成する仕方について検討を行った。ここでは現代の根本問題として、「ショック」の利用があることを、フーコーはもとより、B.マッスミの「存在権力」論、B.ハンの「精神政治」論を参照しつつ検討した。トラウマは今日、ケア体制下でワクチンのように一般化されつつ、常態の形成の一角をなしている。そうして形成される全体性秩序は、しばしばその境界において直接暴力を作動させるが、この普段は隠された次元

に向けたケア論の構築が、課題として導かれた。

以上を通じて、本研究は、転移という人間関係枠組みを超えて展開する情動性についての、精神分析的理解の刷新を提示した。またそのことによって、人間化・言語化された他者へと形象化・客体化されていないような異他性の触発プロセスの重要性を浮き彫りにした。そこからは、政治、芸術、精神医療の各領域において、自己を分裂へと導きかねない異他性を、開かれた運動やそのリズムによって統御するような情動モデルの意義が認識されるに至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 上尾真道	4. 巻 18
2. 論文標題 ラカン・マルクス・セクシュアルレボリューション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 I.R.S. - - ジャック・ラカン研究	6. 最初と最後の頁 67-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上尾真道	4. 巻 1133
2. 論文標題 「すべてでない」地平における政治的審級について――ラカンの「女の享楽」概念の展開――	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 36-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上尾真道	4. 巻 140
2. 論文標題 サントームについて：ラカンとジョイスの出会いは何をもたらしたか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ichiko	6. 最初と最後の頁 18-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上尾真道	4. 巻 49-2
2. 論文標題 新型コロナとトラウマについての時評――感染的-隣人的な倫理に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 フロイトのダイモーンの二つの相貌 - - 1910年代神経症論再訪
3. 学会等名 日本ラカン協会第19回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masamichi UEO
2. 発表標題 l'art brut entre la creation et la communication
3. 学会等名 Corps, Art, Folie : la douleur a l'oeuvre (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 亡者と動物 現代精神分析臨床における「死にきれぬもの」の境域
3. 学会等名 日本精神分析的な心理療法フォーラム第7回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 大学のディスクールと「反哲学」 68年以後のラカンと哲学の行方
3. 学会等名 日仏哲学会2018年秋季大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 ラカン・マルクス・セクシュアルレヴォリューション
3. 学会等名 日本ラカン協会第25回ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masamichi Ueo
2. 発表標題 Un commentaire sur la conference de Colette Soler : de l' inconscient au-dela du transfert
3. 学会等名 4eme seance du Seminaire interenational de sante mentale(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 《非理性的間隙》 - - 精神分析と生成変化
3. 学会等名 日本ラカン協会第30回ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 胎児のコギト - - アンリとラカンの情動論的交点をめぐって
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第12回研究大会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 J.ランシエール著、松葉祥一・上尾真道・澤田哲生・箱田徹訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 航思社	5. 総ページ数 413
3. 書名 哲学者とその貧者たち	

1. 著者名 王寺賢太、立木康介編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 読書人	5. 総ページ数 274
3. 書名 68年5月 と私たち	

1. 著者名 山室信一編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 217
3. 書名 人文学宣言	

1. 著者名 美学会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------